風土記

〈高知県立歴史民俗資料館〉　第8号　1993年7月1日

文化の伝播
―黄河のほとりから―

間宮　尚子

一九八八年に中国の上海、蘭州、敦煌、西安を旅行しました。

その年は間宮國夫が、上海の復旦大学に早稲田大学との交換教授として留学していましたので、思いたったわけです。

八月一三日、中学三年の息子を伴って成田空港を出発、中国民航機は四〇分おくれたのですが、上海へ到着したのは一七時五分で五分おくれでした。間宮と復旦大学外事弁公室の徐明君が出迎えてくれました。

敦煌行きは、旅程の後方に組んでいたのですが、竹下登首相の敦煌訪問と期を一にするようでしたので、急きょ翌一四日出発に変更しました。上海から蘭州へ飛び敦煌の莫高窟千仏洞にいたり、蘭州を経て西安から上海にかえることにしました。

上海から三時間、飛行高度が下がり始めました。眼下は黄土の海、黄砂の波、黄土高原です。中華人民共和国の省都蘭州飛行場には蘭州大学外事弁公室の楊暁天君が迎えてくれ、市内の蘭大まで車で一時間半かかりました。太陽の光は強烈ですが空気は冷たく、楊君は黒の背広です。飛行場でジュースを売る娘さんの頬がリンゴのように赤く、黄土は黄というよりは煉瓦色で、プラタナス・白楊・青楊などの並木を浮きたたせています。

八月一五日、私たち三人の外出時の案内や身のまわりのことは楊君がやってくれます。楊君をふくめ四名の敦煌行きの飛行便はとれず、一七日一八時五六分蘭州発の特快列車の指定券がとれました。北京と烏魯木斉（ウルムチ）を結ぶ汽車で私たちは柳園下車です。

一〇時甘粛省博物館へ行きましたが、盗難があったことで調査のため休館となりました。中国銀行で両替をしました。昼食をとるため自動車で大学に帰り、一四時から白塔山公園へ行きました。黄河沿いの切り立った山の頂に、明代に建てられた寺と白い七層の仏塔があります。ここからは、黄河の流れと蘭州市街が一望できます。この付近には、白い帽子をかぶった回族の住居があり、清真大寺（シンチンダイジ）があります。緑のドームの回教寺院を参観しました。

大学近くの自由市場、路上に山積みされた白蘭瓜、旬だといわれ買って宿舎の冷蔵庫で冷やして食べました。二〇センチ程の白磁色の瓜で、そのまろやかな味を忘れることができません。

八月一六日、八時半甘粛省博物館へでかけました。

蘭州はかつて金城と呼ばれ、シルクロードの要衝として千数百年の歴史をもっており、現在人口二〇〇万、西北随一の工業都市であります。劉家峡ダムを渡ると、莫高窟とならぶ仏教石窟炳霊寺（ピンリンスー）があります。同博物館には石器時代から封建時代までの文物千五百件、彩陶、古代の絹織物、武威の後漢の古墳出土の銅奔馬、二千年前につくられた加彩木製の牛車と牛犂、金代銭幣と西夏銭幣などが展示されていました。

※　※

当時私は今井貞吉の伝記にかかっておりました。一八八八年に刊行された貞吉の大著『古泉大全』に記された中国の古銭を中国で見られるだろうかというおもいがありました。金の正隆元宝・大定通宝、西夏の天盛元宝・乾祐

蘭州〈黄河鉄橋にて〉1988. 8. 15

元宝・皇建元宝・光定元宝の同館展示の古銭は『古泉大全』に記されています。貞吉は古銭研究家であり、コレクターでもありました。当時日本には貞吉以外にも古銭収集家はいました。

正隆元宝を所持していたのは風山軒（貞吉）、寿昌堂、養真亭、傲霜堂、大定通宝の所蔵者は風山軒、甘泉堂、養真亭、彩雲堂、宝丹楼（守田宝丹）、成賀斉といました。金は一二世紀から一三世紀にかけて中国東北部に君臨した女真族の国家です。また西夏文字の制定でしられる西夏は、一一世紀から一三世紀の寧夏を中心としたタングート族の国で、敦煌をはじめとする河西回廊を支配していました。

このように古い時代のしかも遠く離れた土地の文物である銭幣がどのようにして日本に渡来し、どのような経路で上記のごとき収集家のもとに至ったのでしょうか。日本で古銭愛好者があらわれるのは、一七世紀も後半と言われています。アジア各国の各時代に通用した銭幣がラクダや馬や船に乗って日本まで来るには数百年あるいは千年の歳月がかかったでしょうか。それをもたらしたのは、人の交流であり、人の交流があるところに文化は流入いたします。そして、それを受けとめる好奇の心のあるところに、文化は必ず伝播すると思います。

「山内家のよろいとかぶと」の調査とその成果

―夏の企画展によせて―

下村　公彦

当館では、平成五年七月二四日から「山内家のよろいとかぶと」と題する企画展を開催する。これは、山内神社宝物資料館の全面的な御協力のもとに実現の運びとなったもので、同館所蔵の甲冑（かっちゅう）約三〇点が一挙に公開されることになる。

この企画展開催の契機は、昭和六二年から四年がかりで実施された「山内家歴史資料調査」に遡る。本調査は、文化庁の補助をうけて高知県教育委員会が進めた事業で、これによって同館所蔵の多数の美術工芸品や古文書類の全容がほぼ明らかになった。

ところで、この調査の直接のきっかけは、まさに甲冑であったといえる。すなわち、昭和六〇年に武具類の専門家である京都国立博物館の稲田和彦主任研究官（当時）が来高、山内神社宝物資料館の甲冑の概要調査を行なった後、甲冑を初めとする資料群の文化財としての重要性と調査・保存の必要性を説かれたのである。当時、教育委員会文化振興課に務めていた私もこれに係わることになり、あれやこれやで、六二年度から資料調査がスタートした。

美術工芸品部門は、書画・漆芸品など各分野の専門家に調査を委嘱したのであるが、武具類については当然稲田氏にお願いした。同氏は、快諾下さると同時に調査員として東京国立博物館

山内豊資所用　浅葱糸威鎧（あさざいとおどしよろい）（山内神社宝物資料館蔵）

の池田宏文部技官を推薦された。以後四年間、稲田・池田両氏を中心として「山内家のよろいとかぶと」は、新しい照明をあてられることになったのである。

限られた時間の中での調査であったが、その成果を池田氏が『土佐藩主山内家歴史資料目録』(三六頁以下)に報告されている。このうちから、今夏の企画展に係わる部分を中心に要点を紹介したい。

山内神社宝物資料館には、山内家の甲冑類を明治に整理した際の台帳ともいえる性格をもつ『御道具根居　武器武具の部』(以下『根居』と略称する)がある。……調査をした結果、山内神社宝物資料館の甲冑類は以下の三グループに分類できた。

①『根居』記載の歴代の藩主所用の甲冑類……

②『根居』記載の「御方不詳」に該当する甲冑類……

③『根居』に記載がないが、現在山内神社宝物資料館に収蔵されている甲冑類。

①は初代一豊の枇杷形脇立二双をはじめ、二代忠義から十五代豊信に至る歴代藩主の甲冑類である。……歴代の甲冑類は十一代豊興の韋包段替素懸威とした二枚胴具足のような華やかな仕立てのものや、幕末らしい復古的な十二代豊資の浅葱糸威鎧などもあるが、相対に胴丸仕立てや二枚胴仕立て、五代豊房から八代豊敷までの五領の五枚胴(解胴)仕立てのように質実な具足が多い。兜は、尉頭形兜のような当世兜のほか、明珍糸の筋兜を組み合わせた具足が多い。

②は山内家に伝わり「御方不詳」とされる甲冑類である。このうち『根居』に「河内上ノ太子旧蔵」とある紅糸中萌黄糸威胴丸、黒韋威腹巻の二領、「河内金剛山旧蔵」とある三領のうち二領、すなわち黒韋肩紅白糸威腹巻、黒韋肩裾取威腹巻は、いずれも「寛政五年大坂太刀屋庄兵衛ヨリ奉」とあって山内家に献納されたものであることがわかる。上ノ太子は叡福寺、金剛山は金剛寺に該当すると考えられ、金剛寺には室町時代の二十領の腹巻類が現存して重要文化財となっており、これとの関連が注目される。……色々糸威胴丸は紅・萌黄・紫・白糸で胴を片身替威とした胴丸であり、紺糸肩裾紅糸威胴丸は背面引き合わせとして使用した、仕立直しの胴丸である。……

兜には、鎌倉時代と考えられる二十二間星兜鉢、眉庇を改造し、全体を朱漆塗とした朱塗二十八間星兜鉢の二頭が含まれている。前者には寛保元年四月十五日付の広瀬伝太夫の覚書が付属しており、『根居』にも「年久敷鞍馬山ニ有之ヲ故有テ広瀬伝太夫求メ出シ差上ル」と献納の経緯が書かれている。

③は①・②に比べ簡素な仕立ての甲冑類が多く、兜の眉庇裏や胴の裏に「騎新第五号」などと墨書された比較的新しい貼紙が散見される。これらは城内に数多く備え付けとして用意された番具足や御貸具足といわれるような種類の具足であると考えられる。……

また兜のうち左記のものは土佐の甲冑師である土佐明珍の具体的資料である。いずれも鉄錆地。

●二十八間星兜鉢

(銘)土州住明珍丹波紀宗重

明和五戊子年二月吉日於武州造之

●百六十二間筋兜

(銘)土州住明珍大江紀宗安

……山内神社宝物資料館所蔵の甲冑類は、山内家の歴代藩主所用の具足をはじめ、山内家伝来の多くの江戸時代の具足のほかに、献納された鎌倉時代の星兜鉢や室町時代の胴丸・腹巻類も含まれている。いずれも最近の修理の手がほとんど加えられておらず、歴史的にも資料としての価値が高いといえる。しかし破損しているものも多く、今後の保存を考慮すると適切な手当が望ましい。

『山内家歴史資料調査目録』刊行後二年余、この間にも稲田・池田両氏には歴史民俗資料館における甲冑類の展示や保存方法について貴重な助言を頂いた。そして、この度の企画展についても、その立案段階から池田氏には種々相談を持ちかけ、八月七日(土)には「山内家の甲冑」と題する講演会もお願いしている。

一人でも多くの方に今夏の企画展を見て貰うことが、両氏への「恩返し」になる——と思いながら準備作業に取り組む毎日である。

二十二間星兜鉢(鎌倉時代)

＝企画展「土佐古絵図展―描かれた土地の歴史―」講演会から＝

古地図のたのしみ

〈高知大学　大脇保彦教授〉

古地図といいましても、いったいいつからが古地図なのかという問題があると思います。近代以前のものがもっぱら古地図だと言われているようですが、地図というものは時代が進むにつれて古くなっていくものでありますので、そのあたりの判断は難しいと思います。

また、古いものが役に立たないということはなく、古地図にはそれ独特の味わいがあると思います。

例えば、今回の展示品の河田小龍画「土佐絵図」などは、絵画なのか地図なのか区別できません。しかし、だからこそ見る人それぞれが、イメージを膨らませてたのしむということができると思います。現代の地図は、実用的で、正確なのですけれども、たのしむということができにくくなってきていると思います。やはり、実用性と想像できるたのしみを兼ね備えたものが一番役に立つ地図なのではないでしょうか。

次に古地図の解説を幾つかしてみたいと思います。

宿毛の土居絵図には、あちこちに道路が鍵状に曲げられている通称「遠見遮断」がございます。これは高知市や他の城下町にもよく見られますね。野中兼山一族の幽閉地は、違う場所が遺跡の指定を受けていたのですが、この絵図によって正しい場所がわかったなどということがありまして、地図はずっと以前から語りかけてくれているのに、私たちの方が気が付かないことがよくあります。その他には、宿毛の場合、松田川を外堀とした小城下町の景観を色濃く遺しているということも特徴の一つでしょう。

それから窪川の土居絵図ですが、窪川の周辺部から土居の中心に進むにつれ、町屋と武家屋敷に線上ではっきり区別されています。こういったところに江戸時代の封建性の空間的配置がうかがえます。

ところで、地図には色々な種類があります。近代以前の図では、古代・中世の『田図、荘園図、行基日本図』近世の『世界図、日本図、諸国国絵図、城下町絵図、町絵図、村絵図、名所図会、海陸道中図、参詣案内図』などがあり、近代の地図では、『地籍図、更正図、都市図、地形図、地勢図、地方図、国際図、土地利用図、地質図、土地条件図』などがあり、いずれも大中小の縮尺と地図の用途に応じた目的（主題）をもったものが増えてきています。実測と記号化、投影法と等高線の利用なども一般的な特徴と言えましょう。

さて、地図をたのしむための様々な条件を申し上げますと、まず、見る（イメージ化する）ことです。色や、景観、地名、地形などを見ることによって自分の中に色々なものをイメージする。そして次に、知る（読む）こと。その時代の人々の空間認識、社会の発達状況、自然と人間の関係等を推量し、仮説を立ててみるともっとたくさんのことが知りたくなります。そこで調べる（研究する）訳です。同時代のものや、異なる時代のものを重ね合わせ、比較検討することにより仮説を実証していくと、自ら生活空間の時代的変化が読みとれます。福井は昔、水田ばかりでしたが、その中の川の流れに注目してみると、現在の道路の線にそれが重なり合って、昔の景観がある意味で生きていることがわかります。景観は時に土地に刻まれた歴史の地図なのです。私は特に、過去に存在していたものが現代につながっている景観を歴史的景観と呼んでいます。

この歴史的景観を見つけたら次には、描く（結論を作図する）ことです。つまり自分なりの一応の結論から、可能な限りデーターを類型化し、復元してみるのです。資料⑤は、香長平野の中の条里景観の復元図です。見事に古代の景観が生きているでしょう。

私は、常日頃から学生たちに、「君たちは地図のユーザーではなくて、メーカーでなくてはならないのじゃないか」などと言っています。

自分だけの、自分独自の地図を作る。これこそが地図の最大のたのしみだと思うからです。

（文責　野本）

古代条里景観復元図（香長平野）〈レジメ資料⑤より〉

—考古学の視角2—

近世考古学

—高知城下の江戸時代の考古学—

岡本　桂典

一九六〇年代からの高度成長政策に伴う開発は、著しく行政発掘調査を増加させ、日本の歴史的環境のみならず自然環境をも大きく変化させた。そのような状況は、考古学にも変化をもたらした。

昭和四〇年（一九六五）に、東京で行われた日本考古学協会第三五回総会で元立教大学教授中川成夫・現千葉大学教授加藤晋平両氏によって「近世考古学の提唱」がなされたことは、あまり知られていない。その発表要旨の一文に「考古学の定義は広義・狭義の差はあっても物質的資料を媒介として研究するとされており、その対象とする時間の限定はされていない。したがって歴史的区分の一つである。『近世』も当然含まれる。しかし、現在のいわゆる歴史考古学の対象は、特殊テーマを除いて中世までであった。」（『日本考古学協会第三五回総会研究発表要旨』一九六五年）とある。当時の学会は、重要な提言であるにもかかわらず冷ややかであったという。この提言以前、第二次世界大戦後に、近世史や現代史に考古学が重要な役割を果たすことを説いた学者がいた。それは、故岡山大学教授和嶋誠一氏その人であった。

昭和四八年（一九七三）には、立正大学教授坂詰秀一氏が、「近世考古学の意味」（『考古学ジャーナル』八一号一九七四年）の中で近世考古学の重要性を説き、考古学の対象資料を埋没資料のみに限定するのではなく、地上の伝世資料にも注意を向けることの重要性を説いた。

ところで、近世考古学の萌芽がみられたのは、東京の前身—江戸の近世都市遺跡の発掘調査からである。昭和四〇年（一九六五）には、河越逸行氏は、江戸時代の人骨の調査を目的としながら、江戸の遺跡に取り組み地下に豊富な江戸時代の資料が埋没していることを指摘した。昭和五五年（一九八〇）には、『考古学ジャーナル』一八二号において、「中・近世考古学の動向」が組まれ、全国の中・近世遺跡に対する調査の動向が明らかにされた。昭和五〇年（一九七五）には、加藤晋平氏らにより東京都千代田区東神田の都立一橋高校の校舎改築工事に伴う発掘調査が実施され、一七世紀から一八世紀にかけての江戸の町の遺跡の状況が明らかにされたのである（都立一橋高校発掘調査団編『江戸』一九八五年）。

さて、高知における近世—江戸時代—の遺跡の発掘調査は、東京や大阪などに比較すると極めて少なく、高知城下における江戸時代の遺跡の調査となれば皆無に等しい。現在までの主な調査例をあげてみると次のようになる。

昭和三八年（一九六三）に高知市旧NTT高知局とRKC高知放送局に挟まれた地点の工事で、地下四mから木製の下駄と籠が出土した。この下駄と籠が出土した地点は、『高知郭中図』によれば品川某と渡辺喜太夫が居住する武家屋敷跡と考えられる。この下駄は女性用のもので、また籠は日常使う味噌こね用の木器と考えられている。

昭和四八年（一九七三）には、本川村の手箱山にて、氷室跡〈標高一六二〇m～一六三〇mに所在〉の発掘調査がなされた。昭和五五年（一九八〇）には、土佐市吹越において、道路拡張に伴う近世墓の改葬が行われ、筆者は改葬に立会し、墓標と埋葬物の調査を行い埋葬品などの実態を明らかにした。昭和五四年（一九七九）度～昭和五八年度にかけて行われた高知空港拡張整備事業に伴う発掘調査では、近世の方形座棺墓・円形座棺墓・寝棺墓が発掘調査され、土佐における近世墓の様相が明らかにされた。近年では、昭和五八・五九年（一九八三・八四）に安芸市の五藤家の屋敷跡の発掘調査がなされ注目された。

さて、現在の高知市はアスファルト道路により固められ、周辺に高層ビルが建ち並び、江戸時代遺跡の痕跡の可能性については悲観的な状況であると考えられていた。しかし、今年高知市が行った帯屋町公園の地下駐輪場工事現場において、近世から現代にいたる遺構が遺存していることが初めて確認され、高知県の考古学研究史にのこる発見となった。この遺跡地下二mからは、建物の礎石や陶磁器類・木製品・井戸などが出土した。高知城下も地下三尺は、「江戸の華」といえるのである。都市は常に変動し、反復的都市改造の現象がみられる。しかし、そこには確実に我々が生きてきた痕跡が少なからず残っているはずである。

いままさに、土佐の江戸考古学—江戸時代の考古学—が始まろうとしている。

井戸跡

本棚

『海辺―高知の民俗写真1―』

田辺寿男著（高知市民図書館刊）

本年三月に刊行された本書は、昭和三〇年頃から高知県の民俗事象を撮り続けている、民俗写真家の田辺寿男氏（高知市池在住）による、土佐の海の信仰の集大成ともいえる写真集である。

掲載された一三三枚の写真は、それ自体が海に生きる人々の暮らしを力強く物語る貴重な記録である。高度成長を境に、暮らしが急速に変容していく中で、本書にある古い漁浦の出漁風景などは、今や見ることの出来ない風景で、資料写真として非常に価値が高いものとなっている。

土佐の長い海岸線をくまなく歩いて田辺氏が撮った写真には、海に生きる人々のさまざまな心情が写し出されている。海を眺める人や海辺で憩う人々の表情からは無論のこと、人々が祀る神仏の形象や、人々が目にしているであろう風景の写真からも、彼らの想いが伝わってくる。それは、どの写真からも感じられる、田辺氏の真摯なまなざし所以であろう。

「あとがき」で述べられているように、田辺氏は信仰の問題を人間の永遠の問題としてとらえている。本書も信仰に重点を置いた構成となっており、海に暮らす人々から信仰されてきた、えべす、竜宮、観音菩薩などの神仏がクローズアップされている。田辺氏は膨大なフィルムの中から、信仰の対象とされているものは素朴な石に至るまで大切に取り上げ、山間や平野部と明らかに異なる海辺独特の正月の船霊まつりなどを取り上げている。

各章で論述されている海の信仰の諸相は、田辺氏が民俗学の研究者として長年考察されてきたことであり、挙げられている事例も数多く、調査研究の幅広さが感じられる。本書は、田辺氏が研究者であり、同時に写真家であるからこそ可能となった民俗写真集なのである。

『高知の民俗写真』は、この1「海辺」に続いて、2「山間」、3「河川」、4「平野」と刊行される。この巻を堪能した現在、次巻以降の刊行が非常に待ち遠しい。

（定価　三千円）

（中村淳子）

歴史散歩

比江廃寺塔心礎

第八回

南国市国府小学校の南側の道を東へ進み、西南の方向に流れる国分川に近いところに比江廃寺の塔心礎が残る。昭和九年に国史跡に指定された。

塔心礎の大きさは、三・二四×二・二一メートル、これに建てられた柱の径は八一センチメートル、中央に舎利孔があり、径一五センチメートル、深さ一二センチメートルである。江戸時代後期に国分川の改修工事が行なわれ、多くの礎石はそれに使われ、確認できるのは塔心礎のみである。

比江廃寺は七世紀後半ごろに創建されたと考えられている。一九六九年の本格的な発掘調査で塔心礎が創建時から動いていないことや、塔基壇の大きさは一辺が三八尺であることが明らかになった。さらに出土した瓦の位置から東に金堂、西に塔、それらの中心の南に南大門という法隆寺式伽藍配置の寺院跡であると考えられている。

出土した瓦は白鳳時代のものが多く、再建された法隆寺の瓦の系統を引くものである。瓦は土佐山田町植タンガン窯跡で焼かれ、新改川、国分川の水運を利用し、比江の地まで運ばれたものと考えられている。奈良時代の瓦には土佐国分僧寺跡（現国分寺）出土の瓦と同一のものがあり、この時期に比江廃寺が、国分尼寺として転用されたことが「アマシヤ内」という小字名からも推定される。

〈土佐電鉄バス領石・植田行き国府小学校前下車東へ徒歩約一五分〉

（曽我満子）

塔心礎

ニュース

～企画展示室から～
土佐　古絵図展
―描かれた土地の歴史―

土佐の歴史を語る絵図、地図を県内各地から集めた企画展を開催した。旧家に所蔵されていた土居絵図、日本各地との往来を物語る航路図、坂本龍馬ゆかりの日本海路図や世界地図など、三〇点の絵図類を紹介した。

展示資料は土佐藩が作成した官撰図が主であった。土居絵図や国絵図、航路図などがあり、それぞれ土佐の特色を示している。中でも「元禄土佐国絵図控」は、全国的にも例の少ない貴重なものである。民撰図では、土佐湾上空の安芸沖から土佐全体を眺めたように鳥瞰図の手法で描かれた河田小龍の「土佐絵図」などを展示した。

また「世界の中の日本」、「日本地図の歴史」と題したコーナーを設け、県外の資料を写真パネルで紹介した。オルテリウス製作の「アジア図」の中に「TONSA（土佐）」と大きく表示されていることなどが観覧者の興味をひいていた。

関連企画として、高知大学大脇保彦教授による講演会「古地図のたのしみ」を開催した。大脇教授の講演は、現在に残っている歴史的景観から、条里制や城下町などの姿を復原する意義と楽しさを示唆するものであった。また、後の時代ほど精緻になる地図の歴史や、古代・中世の地図は絵画的要素が強く、それがかえって当時の生活空間の雰囲気を伝えていることなどが紹介された。

期間…平成五年四月二九日～五月三〇日

土佐古絵図展　展示風景

講演会「古地図のたのしみ」
ＡＶホール　平成５年５月22日（土）

〈歴民館日録〉

月日	出来事
四月一五日	総合展示室企画コーナー「受贈資料紹介　佐川郷士堀見家の刀」開始
四月二九日	企画展「土佐古絵図展」開幕
五月八日	子ども歴史教室ビデオ上映会
五月二二日	企画展講演会
五月二九日	第一回史跡巡り「西讃岐の文化財」
五月三〇日	企画展閉幕
六月一二日	子ども歴史教室「れきみん探検」

〈平成五年度第一回史跡巡り〉

平成五年度第一回史跡巡りは「西讃岐の文化財」と題して、空海ゆかりの古刹、雲辺寺・弥谷寺・善通寺を訪れた。当館の学芸員岡本桂典が仏教考古学の立場から、寺院や信仰遺跡の解説を行なった。

県外への史跡巡りは今回がはじめてであったが、参加者は険しい階段をものともせず、四国霊場信仰に肉迫するこの企画に堪能していた。修行窟を見学し、内部の煤けた天井について護摩を焚いた跡であろうという説明に感銘を受けるなど、遍路の世界にふれた清々しい一日であった。

平成五年度「歴民サークル」会員募集

資料館では、館をご利用いただく方々に各種催しの情報等をご提供するための会員を募集しています。

年会費は千円で、会員証を発行し毎年四月に更新します。入会されると、館の企画展や講座、見学会などのご案内と共に、当誌を年四回お届けするほか、岡豊山公園内のかや葺き民家を句会等の文化活動に利用できるなどの特典があります。

ご希望の方は、氏名、住所、電話番号、生年月日をご記入のうえ、郵便局発行の定額小為替千円分を同封して郵送して下さい。また館の受付で申しこまれても結構です。くわしくは、館の「れきみんサークル係」あてお問い合わせ下さい。

〈新職員の紹介〉

春の異動により、歴民館に配属になりました野本亮です。

三月まで中学校現場におりましたので、意識を変えるのが一苦労です。

仕事の上では、教職六年の経験を生かして小中学生の社会科に役立つ企画等を考えてみたいと思っています。

企画展は四国の戦国武将に関するものを考えています。どうぞよろしく。

〔企画展の案内〕

山内家のよろいとかぶと

平成五年七月二四日（土）から八月二九日（日）まで、企画展『山内家のよろいとかぶと』を開催します。

防御用の武具として生まれた甲冑（かっちゅう）は、古代以来、戦闘形態や武器の変化に対応し、また金工・漆工など各種工芸技術の進歩に伴って変遷をとげてきました。甲冑の歴史は、まさに戦乱の歴史と美術工芸の歴史が重なり合って成立したものといえましょう。

今回は、山内神社宝物資料館所蔵の甲冑のうち、歴代藩主の具足類や古く中世の鎧（よろい）・兜（かぶと）を紹介します。ぜひ御覧下さい。

入館料は、大人四〇〇円、中高校生一五〇円、小学生五〇円（常設展込み）です。

山内豊常所用
浅葱（あさぎ）糸素懸威（いとすがけおどし）二枚胴具足
（山内神社宝物資料館蔵）

〈関連企画〉

●講演会（予約制・無料）

演題　「山内家の甲冑」

講師　東京国立博物館学芸部工芸課主任研究官　池田宏氏

日時　八月七日（土）午後二時～四時

定員　八〇名、参加御希望の方は、七月三一日（土）までに、住所・氏名・電話番号を御記入のうえ、葉書にて当館までお申込み下さい。

●子ども歴史教室

テーマ　「かぶとをかぶる」

日時　八月一四日（土）〈第二土曜日〉午前一〇時～一一時

場所　体験学習室

定員　約三〇名、希望者多数の場合先着順でお断りすることがあります。

〈利用案内〉

開館時間　午前9時～午後5時（入館は、午後4時30分まで）

休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）12月28日～1月4日

入館料　一般・400円／中高校生・150円／小学

〔常設展示〕生・50円

団体（20人以上）割引きあり

（療育手帳・身体障害者〈1・2級〉手帳所持者とその介護者高知県長寿手帳所持者は無料。毎月第2土曜日は小中高生は無料）

交通機関

高知市中心部から車で約20分。

駐車場（大型バス4台・普通車50台）あり。

バスを利用する場合は次のとおり。

〔県交通〕　船岡南団地発歴民館行き終点下車。

領石・奈路・田井方面行き学校分岐（歴民館入口）下車。

（徒歩5～10分で資料館へ）

〔土　電〕　新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。

（徒歩10～15分で資料館へ）

〔図録販売中〕

◆「土佐　古絵図展―描かれた土地の歴史―」展示解説図録

領価七〇〇円　送料一冊二四〇円

頁数二九頁（カラー）残部僅少

◇「鯨の郷・土佐～くじらをめぐる文化史～」展示解説図録

領価一、〇〇〇円　送料一冊三一〇円

頁数八八頁（内カラー六四頁）

残部僅少。

○「常設展示案内図録」

領価一、五〇〇円　送料一冊三一〇円

オールカラーで、総合展示室と民俗展示室の代表的な資料を紹介する。

※二冊以上のご注文はお問合せ下さい。

〈ひとこと〉

歴史の古代・中世を担当していた梶原瑞司学芸主事は、本年四月一日より高知市旭中学校に異動になりました。資料の借用交渉や史跡巡りなどでは在任中、県民の皆様に大変お世話になり有り難うございました。厚くお礼申し上げます。

次回の企画展「山内家のよろいとかぶと」の準備に大わらわです。今度の企画展は、重い企画？です。（下村）

平成五年七月一日

編集・発行　高知県立歴史民俗資料館

〒783 南国市岡豊町八幡1099－1

TEL　0888－62－2211

FAX　0888－62－2110